RittorMusic
An impress Group Company

各　位

2016 年 7 月 13 日
株式会社リットーミュージック

『ベース・マガジン』の人気連載が、待望の書籍化
トップ・ベーシストたちが愛器への想いを語り尽くす。

インプレスグループで音楽関連の出版事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：古森優）は、7 月 25 日、書籍『MY DEAR BASS』を発売します。

本書は、音楽専門誌『ベース・マガジン』で 1990 年より連載される、トップ・ベーシストの愛器を紹介する人気コーナー『MY DEAR BASS』をまとめたものです。連載全 281 回の中から、約 100 人のアーティストをピックアップ。今回の発売にあたり、亀田誠治、JIRO、KenKen、ハマ・オカモトによる、それぞれの愛器への思いも新規収録しています。珠玉のフェンダー・ヴィンテージ、ひとクセもふたクセもあるギブソン、各メーカーがブランドの意地と誇りをかけたモデルたち、独自のこだわりで 製作された多弦＆少弦、ダブルネック、イチから作り上げられた世界にひとつだけのカスタム……。 ベーシストたちが“この1本”を語る時の楽しげな様子も見どころです。誌面を大きく使った美麗なグラフと詳細な解説で送る完全保存版を、お楽しみください。

《書籍》

MY DEAR BASS　ベーシストが愛してやまぬ“この 1 本”

編:ベース・マガジン編集部
定価:2,376 円(本体 2,200 円＋税)
仕様:B5 判／208 ページ
発売:7 月 25 日
書籍詳細　http://www.rittor-music.co.jp/books/16213002.html

●CONTENTS
掲載予定ベーシスト:
亀田誠治、JIRO、KenKen、ハマ・オカモト、細野晴臣、岡沢章、佐久間正英、美久月千晴、伊藤広規、松原秀樹、IKUO、高水健司、鳴瀬喜博、江藤勲、岡野ハジメ、TOKIE、IKÜZÖNE、マーカス・ミラー、ブーツィー・コリンズ、スティーヴ・ハリス、レミー、ミック・カーン、ウィル・リー、ジョン・マイアング、アンソニー・ジャクソン、チャック・レイニー、トレイ・ガン、T.M.スティーヴンス、他

#002 JIRO's TOP DOG JRO-01

JIRO (GLAY) のトップドッグ初号機 (JRO-01)

BASS ●英語入手年:1995年●ボディ:アルダー●ネック:メープルアイメイプル●指板:メープルアイメイプル●スケール:432mm●ピックアップ:セイモアダンカンSJB1×2
DATA ●コントロール:ヴォリューム、ベース、トレブル●ペグ:ゴトー GB-1●ブリッジ:ゴトー GEB-201

●鮮やかなブルーだったボディは緑色へと退色している。JIROは曰く、"初号機は塗装の剥げもあってか、気温や湿度などの影響を受けやすく、ライヴで使うとコンディションが安定しないってのこと。

●こちらは1996年にベース・マガジンで撮影した初号機の姿。現在と比べると青さが実に鮮やかだ。"SHUTTER SPEEDS"のステッカーも、まだ貼りはじめていった感じ。

❶ペグはゴトー GB-1。テンションを考慮してか、1弦&2弦にはストリングガイドが確認されている。ヘッド全体に入った塗装の経緯から、長年にわたって使われてきた風格を感じる。❷バーズアイの入ったメイプル・ネック。ちなみに初号機のネックは佐久間氏がスプレー缶で塗装したそうで、これ以外に JIRO が所有するトップドッグの個体は、工場でのラッカー塗装になる。初号機と同じシェイプをオーダーしても、塗装などによってネックを握った印象が異なるそうだ。❸ピックアップはセイモア・ダンカンの SJB1 を2基マウント。アルニコ・マグネットを用い、オーソドックスかつクリアなジャズ・ベースのサウンドを出力するモデルだ。❹ JIRO が最もこだわる弦高。その要となるブリッジは、ゴトーの GEB-201 をマウント。できるだけ弦高を下げながらも、弦がビビらない高さをシビアに追求している。

❺お馴染みの "SHUTTER SPEEDS" のステッカー。まわりの塗装が剥げているが、ステッカーはしっかりと原型をとどめているのが印象的。ステッカーはボディとピックガードに跨がって貼られているが、表、裏、佐久間氏が初号機のメンテナンスを手がけた時も、このステッカーに苦労していたようで、"ステッカーをうまいこと剥がしてピックガードをはずして調整し、また元に戻していました"とは JIRO の弁。❻コントロールはヴォリューム、ベース、トレブルと極めてシンプル。❼ジョイント部分は4点止めのボルト・オン。プレート・マウント部分をよく見ると、ネックとボディの接合部の左右センターから若干、右へとずらしているのがわかる。ちなみにボディ材は中心線から判断できるよう、2ピース構造を採用する。❽ JIRO のオリジナル・ストラップには、彼自身がヴォーカルを担当する「SHUTTER SPEEDS のテーマ」の歌詞がプリントされている。

12　13

#004 HAMA OKAMOTO's FENDER PRECISION BASS '68

ハマ・オカモト(OKAMOTO'S)のフェンダー プレシジョン・ベース '68

BASS DATA ●米国製造年／入手年:1968年／2011年●ボディアルダー●ネックメイプル●指板ローズウッド●フレット数20●ピックアップ:フェンダーオリジナル●コントロール:1ヴォリューム、1トーン

●ボディ裏に見えるのは、前オーナーが付けたバックル傷。途中でシールを貼って割れを防いでいたようで、その部分だけ塗装が色濃くなっているのがわかる。

❶本文中にもあるように、ハマが学生の頃からこだわっていた"丸ペグ(パドル・ペグ)"。ジャズベにも見られる仕様だが、プレベは68年製造の個体のみに採用されたレア・スペックだ。クロームメッキのため経年劣化にも強く、新品のような輝きを保っている。❷ハマのこだわりその2、フィンガーフンプ。もともとは歌中に楽器を構えた際に右手を固定するためのもの。ハマは基本的にオフ・ジャンパーだが、"ハマで理由はないし、あったほうが(見た目の)バランスがいい"と説明する。❸"この楽器の特徴はここ"と言う、ピックガードのネジ。調入当初からピックガードの上部に浮きがあり、何とかして押さえたいと思ってフェンダーに相談。その結果、数種類のワッシャーなどを試して、このような処置に至ったとのこと。❹"楽器の見た目はここで決まる"と、ハマがこだわるのがピックガード。当時、ベッ甲柄のピックガードの素材に象人が作製で制作しており、模様にも個体差があった。現在は機械を導入するなどして、柄のニュアンスは均一化されている。本器の場合は60年代らしくベッ甲柄の模様が大きいのが特徴。ちなみに70年代になると"パンチパーマみたいに細かくて、あみの強い柄になる"と力説してくれた。❺ハマのこだわりその3、ブリッジ・フェンス。その理由を"楽器に説得力が増すし、そもそもあったほうがカッコイイ"と語る。写真はフェンスを留めるネジの部分。弦交換のたびに取りはずすため、ネジ穴がゆるんでしまい、ワッシャーを付けて固定している。❻プレシジョン・ベースのネックは、68年よりポリウレタン塗装となるため、それ以前のラッカー塗装のように、サテン・フィニッシュのように剥げていくのとは異なり、このように塗装のヒビから割れるように剥がれていく。❼非常にきれいな状態を保った、美味のあるローズウッド。フレットは一度、打ち替えているとのこと。

FENDER HAMA OKAMOTO PRECISION BASS #4

¥84,000(税抜)

http://www.fender.co.jp/

●フェンダーから発売されているハマ・オカモトのシグネチャー・モデル、HAMA OKAMOTO PRECISION BASS #4。パドル・ペグ、ブリッジ・フェンスといったスペックは、上述の68年製プレベが元になっている。また、ネック・シェイプはジャズベ・タイプで、ボディにバスウッドを採用。ちなみにその表記はスティーヴィー・レイ・ヴォーンの名器"#1"に由来する。"入門向けとして手頃な価格で、きちんとした楽器を"というコンセプトにこだわって製作されたモデルだ。

#007 MARCUS MILLER's FENDER JAZZ BASS '77 1995年5月号掲載(ACT-35)

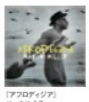
マーカス・ミラーの フェンダー ジャズ・ベース '77

PROFILE

マーカス・ミラー●1959年8月14日、ニューヨーク生まれ。81年にマイルス・デイヴィスのアルバム『Tutu』に抜擢され、一躍注目を浴びる。一連注目を浴びる。84年には『Marcus Miller』(邦題パーフェクト・ガイ)をリリースし、ソロ・アーティストとしても人気を確実なものとした。スラップ奏法を始めとした多彩なテクニックが多くのベーシストを魅にし、77年製のジャズ・ベースから放たれるNYCサウンドは、ひとつのジャンルとして語られるほどとなっている。
©http://www.marcusmiller.com

BASS DATA

●米国製造年／入手年:1977年／1977年～80年頃●ボディ:スワンプ・アッシュ●ネック&指板:メイプル●フレット数:20●ピックアップ:フェンダーオリジナル●プリアンプ:パルトリーニTOT●コントロール:2ヴォリューム、2トーン、ミニスイッチ(プリアンプのオン／スルー切り替え)●ペグ交換、ブリッジをバダスベースII へ交換。



「アフロディジア」マーカス・ミラー

同じ仕様のものが他に3本あるけど、これはママが買ってくれたやつだから特別なんだ。

僕のメイン楽器はフェンダー・ジャズ・ベース。70年代のやつだ。もちろん他に5弦や6弦も弾くけど、ベースらしいプレイを常に意識してるから、基本的に僕は4弦を使うことが多い。しかも、このフェンダーのジャズ・ベースをね。実は5～6年前(1990年頃)いろんなベースを試したことがあるんだけど、ドラマーが"やめてくれっ！"って怒るから、結局もとのやつ……つまりこれに戻ってしまったんだ。

僕はベースを始めた時からジャズ・ベースさ。なぜかと言うとジャクソン・ファイヴのジャーメイン・ジャクソンがこれを持っていて、彼を見てベースを弾こうと思ったから。あのカッコいいベース・ラインをジェームス・ジェマーソンが弾いていたってことはずいぶんあとになってから知ったね。でも、僕にとってジャーメインはアイドルだったから、何でも彼の真似をしていた。僕の手は比較的小さいからジャズ・ベースの細いネックもちょうどよかったんだ。

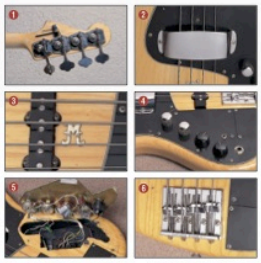
これは僕にとって3本目のジャズ・ベースでね、前の2本は盗まれてしまった。でも今では家にこれと同じものが合計3本ある。その中でも僕にとっては何と言ってもこのベースが一番なんだ。だってこれはママが買ってくれたものだからね。

1980年頃に、とある友達がロジャー・サドウスキーを紹介してくれた。ロジャーは"このベースにプリアンプを入れたらもっといいサウンドになる"って言うから、僕は一切の注文をつけずに彼に任せてやらせてみた。81年に完成したこのベースはブリッジがバダスに替わっていたよ。誰もがこのベースに"マーカス・ミラー・サウンド"のマジックが潜んでいると信じ、回路を覗きたがる。でも何も見つからないよ。だって、僕のサウンドは15年間、このベースを叩き続けてきた結果なんだ。セッションでもソロでもセッティングは同じで、ピックアップのヴォリュームは両方フル。トーンはトレブルを若干下げたりする。ソロを弾く時はフロント・ピックアップを少し下げ、ハードな音を得る。家にある他のジャズ・ベースも同じ音がするね。

ピックアップ・カバーはね、僕がベースを始めた時から付いていた。これもジャーメインの影響だね。カバー本来の機能はわかってなかったんだけど、僕はここに手の平を叩きつけるようなスラップをしてきたから、今ではこれなしじゃ弾けない。温かい音、スローなブルースはここよりネック寄りで、メロディや速いフレーズはブリッジ寄りで弾くよ。後者の時は親指をカバーに乗せたりもする。NYのベーシストには僕以外にもピックアップ・カバーをアテにして弾くベーシストがいるみたいだね。特にスラップとなるとNYとLAではスタイルが異なる。LAはナイス&スムーズにネック寄りで手首を回転させるようにして弾く。そうすると、ハーモニクスみたいな倍音が融こえる。その代表がルイス・ジョンソン。NYの連中はネックから離れた場所で真上から強引に叩きつけるから、汚いと言えば汚い音なんだけど、パワフルな感じ。しかも僕はその時、手の平でピックアップ・カバーを叩きつけちゃうんだ。これならじゃスラップは不可能だよ！

僕は汗をあまりかかないから、フィンガーボードはいつもきれいだし、弦もあまりサビない。たまには楽器を拭くけど、これといったメンテナンスはしてないね。ボディの裏側の塗装がこれ以上剥げないように、なるべくベルトを締めないとか、ピックアップ・カバーがぺっちゃんこにならないよう、ベースをうつ伏せに置かない……くらいかな。一番のメンテナンスは、楽器をたくさん弾くことだよ。

みんな僕のベースの秘密に興味を持ったり、僕と同じアンプを使ったりするけど、それよりも自分のスタイルを見つけることを薦めるね。別にこれと同じセッティングをしたって僕と同じにはならないし、もしなったとしてもそれでどうなるの？僕はNYでこのベースを使って、カントリーやレゲエとかまでやってきたんだ。いつでもその時にやってるジャンルにふさわしい音を探していた。カントリーの時はミュートしながら親指で弾いたり、ブリッジにティッシュペーパーを挟んでやったりけっこうイケる！と思って、僕のスタイルの一部に採り入れたりね。さんざんいろんなスタイルを試し続けた長年の結果がこのベースのサウンドなんだ。僕が他人のベースを弾いてもたぶん僕のスタイルになるだろうね。ただし、ピックアップ・カバー付きであることが条件だけど。



❶ヘッド裏には2種類の六角レンチがセットされているが、これはブリッジ調整用とペグのトルク調整用のもの。ペグはコトーンのものに交換されているようだ。❷マーカスのプレイ・スタイルにはなくてはならないPUカバー。他にこのカバーを必需品としているベーシストはウィル・リー、青木智仁などがいる。❸PUはフロント、リアともにオリジナル。Mのプレートは、後のイニシャルだ。❹コントロールは2ヴォリューム&2トーンで、ミニ・スイッチはプリアンプのオンとスルーを切り換える。ピックガードの左上は四角にカットされているが、この下にはプリアンプ用の電池が入っている。つまり電池の交換もピックガードをこはずさずに行なえるわけだ。❺ピックガードをはずすとサドウスキーがチューンしたというサーキットが見える。心臓部はパルトリーニのTOTだが、かなりさい・タイプのもの。本来TOTは3トーンだがミッドは固定されているようだ。ポットはすべて交換されており、ピックガードの裏面はきっちりシールディングされている。❻ブリッジは定評あるバダス・ベースIIにリプレイスメント。高い剛性による狙いの少なさや調整のしやすさで定評のあるアイテムだ。

 撮影:長地高二 通訳:子安フミ

#086 HAJIME OKANO's VIBRA 1 1999年12月号掲載(ACT-5)

岡野ハジメの
ヴァイブラ1号

PROFILE
おかの・はじめ● 17歳でベースを始め、1977年にスペース・サーカスでデビュー。ショコラータや東京ブラボー、PINK、PLUGSといった数々のバンドでベーシストを歴任。DEAD END や L'Arc ～ en ～ Ciel などの作品を手がける。日本屈指のプロデューサーとしても知られている。自作のVIBRA BASSシリーズを通じて確固たるサウンドを探求し続ける楽器マニアの顔も持ち、これまでに製作した楽器は10数本にも及ぶ。15年、自身のスタジオが落成したことで、完全に独立したレコーディング環境が完成。これにより制作作業のほとんどを同スタジオで完結できるようになったという。

BASS DATA
●本器製造年：入手年:不明●ボディ:ウォルナット／マホガニー／メイプル（5ピース）、アルミ（ウィング）●ネック:メイプル／ウォルナット（7ピース）●指板:エボニー●フレット数:24●ピックアップ:ヤマハBB-2000より流用●コントロール:1ヴォリューム、1トーン

[PINK BOX]
PINK

今でも僕は好きだけど、ちょっとボトムの太さが足りないのね。

普段ひとりでベースは弾かないよ、面白くないし。やっぱりバンドでやらないとね。あと、アンプを通さないと音もよくわからない。ただ、ピックアップを交換したりとか、いじっては いる。弾くよりもそっち。調整したり、なでてみたりとか。

これはもともとグレコのGO-B-2というスルーネックのモデルが母体。で、それのボディをパーツ・センターかなんかで見つけてきて、東急ハンズで切ってもらったの。デザイン、寸法出し、組み立て、全部自分でやったよ。最初は両サイドのボディの部分は、支柱を介してボディ・センターに対して、ちょっと離れるようにしたかったけど、強度の問題があってそのアイディアは却下した。あと、ボディ・トップのアルミ板と透明なアクリル板の部分は最初、アルミを使わずに全部透明なアクリル板にしようとも思っていたけど、これも強度の問題で難点があって、このようになったわけ。

塗装はもう割ばちゃったけど、自分でやったよ。塗装前のサンディング・シーラーってのもちゃんとやった。指板がローズで普通に吹くと塗料を吸い込んじゃうから、目止めをしなきゃいけなくて、この作業がけっこう大変だった。フレットも全部マスキングしたり。でも、プラモデルをやってた人ならわりと簡単にできる作業かな。僕にもそのへんの下地があるからさ。ボディのメカが透けてる部分はもちろんダミーで、プラモデルのパーツを使ったよ。タミヤの35分の1のパンサー（ドイツの戦車）とチーフテン（イギリスの戦車）を分解してコラージュにしてるの。それとジープのパーツもいくつか。その手の人が見れば、ラジエーターが付いてるなとか、サスペンションがあるなってわかるはず。『未知との遭遇』とか『スターウォーズ』と同じ手法だね。あのへんの映画に出てくるメカは、よーく見るとほとんど日本のプラモデルのパーツなんだよ。ちょうどこのベース作ってた頃にこの手法が流行っていたんだ。

ピックアップは最初はGO-Bの純正のやつを付けていて、あとからグレコのサンダーバード・タイプのやつに付いていたハムバッカーに換えた。それがけっこう気に入ってレコーディングでもかなり使ったんだよ。ただ、このハムバッカーは出力がものすごく大きくて、エフェクターとのマッチングに問題があった。それでこのヤマハのピックアップを見つけたわけ。あ、その前にフェンダーやディマジオに換えたこともあるよ。

フィンガーレストの木片はとっておきのパーツ。実は子供用のブロックなの。木をネジで止めてキリンを作ったりロボットを作ったりするやつ。僕が幼稚園くらいのときを遊んでたやつがウチに残ってて（笑）。それちょこちょこ切りながら使っている。だから他のベースにも、このパーツを付けてたりするよ。プラスチックだと大きくなっちゃうからけっこう重宝してるの。だからモノは古いよ。年代モン（笑）。

まあピックアップも大事なんだけど、それよりも僕はネックやブリッジ、ナットといった……要するに弦がどういうふうに振動するかに興味がある。ボディ材が云々よりも、そっちのほうを優先するかな。特にネックの強度は気になるね。今、流行りの薄めのやつはどうも好きになれなくてさ。その点、このネックはすごく好き。グレコのネックっていいんだよ。野蛮に使ってもへこたれないというか。

このイカ・ベース、前はトレモロ・アームを付けていたけど、アームだけ取っちゃった。でも、ブリッジ部分はそのまま。要するにブリッジがブラス・プレートに乗っかっている。よく見るとブリッジが浮いてるのがわかるでしょ？　普通ならアームをはずした時点で、プレートと密着するようにネジで固定しちゃう。原理的にはそれでいい振動になるはずだから、僕もやってみたんだけど、ヘンな音になっちゃった。こういうふうに浮いてないと、このベースの音がしないんだよ。

一時はずーっとこれば っかりを使ってた。途中、いくつか他の楽器も使ったりもしたんだけど、結局この子に戻ってきてしまう。このベース、今でも僕は好きだけど、ちょっとボトムの太さが足りないのね。ボディの音色自体がすごくハイ上がりっていうか、ギター的っていうか。そういう音だから、ボトムを押さえる時に不満が残るわけ。ブライトさで言えばルックスと同じでめちゃくちゃ派手。でも、どんなにロー・エンド持ち上げても、周波数の中心がギター寄りにあるんだよね。できればそれを200ヘルツくらい下に持っていきたい。そんなわけで、久しぶりにまたメインのベースを作ろうかなと思ってて、今模索中。特にボディ材とピックアップ、ネックの形状と音の相関関係について研究中なんだ。

❶ボディ裏にトレモロ用に空けられた梅円の穴はややイビツだが、最初はカバーを付けていたため見えなかったそう。❷ピックアップはヤマハのBB-2000用のもの。同野が好きなピックアップだが、生産完了が近づいているため、いろいろと探し回ったという。ピックアップに貼られたガムテープは指がボールピースに触れないため、ノイズ対策の一環。使い込むうちにテープが剥けたり薄くなった箇所からボールピースが覗える。❸ナット内側にあるブラスの板はもともとの仕様。よく見るとその下にアルミの板が挟み込まれているが、これは高さを合わせるために開野が後したという。❹ブリッジはグレコのGO-Bに付いていたものを改造している。弦間ピッチはヤマハのピックアップとうまく合ったそうだ。ブリッジの下の台座は、特注で作ったベース用トレモロ・ユニットで、当時としては超画期的なものだった。その横にあるブラスのプレートも特注品だ。❺両側の分厚いアルミ板は東急ハンズで買って面けてもらったのだそうだ。2本とも同じ角度で面けるのが大変な作業だったらしい。

#008 MASAHIDE SAKUMA's FENDER JAZZ BASS 1995年9月号掲載(ACT-39)

佐久間正英の
フェンダー ジャズ・ベース

PROFILE
さくま・まさひで● 1952年、東京都生まれ。中学時代にギターを始める。ベースに転向したのは73年。MythTouch結成時のこと。75年に四人囃子、78年にPlasticsへと参加して活躍。プロデューサーとしても名高く、BOØWY、GLAY、黒夢などと日本を代表するロック・バンドを手がけた。また、楽器製作にも携わり、Top Dog名義で数多くのプレイヤーに楽器を提供してきた。2014年1月16日、逝去。
○ http://www.masahidesakuma.net

BASS DATA
●本器製造年：入手年:1972年～73年／1975年頃●ボディ:アルダー●ネック&指板:メイプル●フレット数:20●ピックアップ:フェンダーオリジナル●コントロール:2ヴォリューム、1トーン●改造点:ブリッジ交換

[SAKUMA DROPS]
V.A.

最近自分でベースを作るようになったのは、このベースがきっかけなんです。

72～73年製だと思うんです。僕が買った時には新品で、かれこれ20年以上は使っています。当時、僕はとにかくジャズベが欲しくて、これを試しに弾いたら気に入って。本当は黒のジャズベを探していたけど当時はなくてね。あの時代はフェンダーやギブソンは高級品で数が少なく、楽器店の棚列側に入れてあり、なかなか触らせてくれなかった。プロのミュージシャンでもフェンダーやギブソンの楽器は持ってなかった。だからこれを買う時には、選択の余地がなかったという感じです。僕はもともとギターを弾いていて、四人囃子のひとつ前のバンドからベースを始めたんです。始めた頃は、楽器は別に何でもいいやと思って何本か使っていたけど、あとでやっぱりいいベースじゃないとダメだとわかって（笑）。僕はギター弾きだったから、ベースをあなどった部分があったんでしょうね。

このベースは今でもちゃんと生きている。それがすごいなって思います。一時はさすがにこの楽器にガタを感じて、捨てるしかないなと思い、しばらくは弾かずにしまっておいてたんです。でも、久々にセッションで使ってみたらメチャメチャ良くなってて。このベースの良いところは、まずチューニングが狂わないということ。四人囃子の頃は、何ヵ月もチューニングしたことがなかったんです。その当時僕は、わざとレコーディングの3ヵ月前から弦を替えないようにしていて。たとえ弦を替えてチューニングして、どこかのセッションに行ったとしても、ケースから出してからチューニングをしたことがない。今でも狂わないですね。20年間、ネックにフレット、その他のどこも調整したことがないんです。ブリッジのサドルだけは買ってすぐに取り換えましたが……それだけかな。結局これがずっと僕のメイン・ベースで、20年間使ってたとは思えないはずです。それはひとえに僕の弾き方のせいだと思うんですよ。例えば誰かにこのベースを貸すとチューニングが狂ってしまう。ベース・マガジンでやったピック弾きの特集でも話しましたが、無駄な力を入れなければフレットも減らない。楽器の保存はケースに入れて部屋に置いておくだけで、湿気のある場所に置いても平気。四人囃子の頃はよく放り投げたりとか、どこも壊れてないし……楽器としての完成度は凄まじいらしい。僕も見習いたいところです。実は最近、自分でもベースを作っていますが、そのキッカケがこのベースで、たくさんのことを教えてもらいました。特にいい作りをしてるわけでもないし、いい金具でブリッジを作ってるわけでもないのに、いい音を出すというのがすごい。例えばネックとボディのつなぎ目に少し隙間があるのですが、作る人の立場からすると ちょっとイカンなと思うわけです。こんなゆるいはめ方だとね。でもそんなことは関係なく、いい音するし、別に狂いがくるわけでもないって、すごいですよね。

僕は楽器をすぐ売っちゃうほうだけど、このジャズベだけは絶対に売らない。昔、松井常松にどうしても売ってほしいと頼まれたけど、イヤだって断りました（笑）。BOØWYの頃は、彼がこのベースを弾いてレコーディングしてました。僕がプロデュースするバンドには、よくこのジャズベを貸してるんです。例えば黒夢なんかもね。自分でベースを作り始めた理由のひとつに、いろんなバンドを長いことプロデュースしてきて、ずっと思ってたことがあって……みんなロクな楽器を持ってないというか、何かしら楽器に問題を抱えてる人が多いんですよ。で、そのつど直してあげたりしてたんですが、結局僕のベースやギターを貸すことが多くて。そうこうしている時に一度、どう調整しても良くならないベースがあって、試しに僕のジャズベのネックを付けてみたんです。そしたらそれだけで良くなったことがあって。で、楽器を直すよりも作るほうが早いなと思い、試しに1本作ってみたら、予想どおりいい音が出たんです。なんだ、簡単じゃんって（笑）。それは、いろんな楽器を修理してきて、僕の中でこうすればいいのにって思うところがあったからなんです。20年間、演奏家として楽器を研究してきたわけですから。

自分が作った楽器は全部、実際に僕がレコーディングで試してみて、調整するところがあればして、そのあとで本人に渡すようにしてます。今までは一般に売ってきたものじゃないから、その人の演奏スタイルや音などを把握したうえで、その人に似合ったパーツを僕が勝手に決めて作ってたんです。でも、この先知らない人に作る場合があるとしたら、できればどういう演奏するのかを知って、注文を受けたいなと思います。実際に僕の前で弾いてみさせいと（笑）。それぐらいわかってないと、逆にその人に悪いなって思うんですよ。

❶ヘッド部には65年以降から使用された、順巻きのペグがレイアウトされている。まとロゴの横には形マークが刻印されているので、72年以降に製造されたモデルだと推定できる。❷ネックは1ピース・メイプル。黒のブロック・ポジション・マークがはめ込まれているが、両角の形状がやや雑にも見える。❸ネック・ジョイントは4点止めのデタッチャブル方式で、プレートのシリアル・ナンバーは"386598"と刻印されている。❹ピックアップは未改造なので、オリジナルの金ボのフェンダーのシングルコイルがマウントされている。各弦に2本ずつのボールピースを持った駒歯みの形状だ。❺コントロールの構成は2ヴォリューム&1トーン。もちろんコントロール・ノブも、オリジナルのままだ。❻指板オリジナルのままではないブリッジ。買った当初は、スパイラル・タイプのサドルだったが、ネジがゆるみやすいのを理由に、フルアジャスタブル・タイプに交換してある。

【株式会社リットーミュージック】http://www.rittor-music.co.jp/

□所在地:〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング □設立:1978 年 4 月 10 日 □資本金:1 億円 □決算期:3 月 31 日 □従業員数:93 名(2014 年 3 月 31 日現在) □代表取締役:古森優 □事業内容:音楽関連出版事業

【インプレスグループ】 http://www.impressholdings.com/

株式会社インプレスホールディングス(本社:東京都千代田区、代表取締役:唐島夏生、証券コード:東証 1 部 9479)を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「モバイルサービス」を主要テーマに専門性の高いコンテンツ+サービスを提供するメディア事業を展開しています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社リットーミュージック デジタルマーケティング室 宣伝広報
Tel: 03-6837-4728 / E-mail: pr@rittor-music.co.jp